

島津忠夫著

連歌師宗祇

岩波書店

連歌師宗祇

一九九一年八月二十八日 第一刷発行 ©

定価四四〇〇円

(本体四二七二円)

著 者 島 津 忠 夫

発 行 者 安 江 良 介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋二丁目五
発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 〇三三六五二二(案内)

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-002516-3

目次

第一章	生涯と文学——序にかえて	1
第二章	初期連歌論の成立——長六文と吾妻問答	7
第三章	宗祇と心敬	35
第四章	春は江戸辺に——東野州消息の成立年次と内容	53
第五章	宗祇と東常縁	67
第六章	連歌師への道——萱草と竹林抄	87
第七章	宗祇と宗伊	103
第八章	連歌の正風を求めて——老のすさみ	121
第九章	紀行の文学 筑紫道記	139
第十章	宗祇と門弟たち	155
第十一章	新撰菟玖波集まで——祈念百韻を読む	173

第十二章 足なうてのぼりかねたる筑波山

——基佐・宗祇確執をめぐって……

199

第十三章 連歌師宗祇と和歌

215

第十四章 宗祇と芭蕉

235

付 一 紀伊生国説の可能性

249

付 二 含翠堂文庫蔵『老葉』付載「宗祇付句」

263

付 三 宗祇略年譜

269

あとがき(付 扉写真一覽)

301

参考文献一覽

第一章 生涯と文学——序にかえて



応仁の大乱をはさんで八二年の生涯を乱世の中に生き抜き、連歌という文芸を大成した連歌師宗祇には、文学に尽くしたなみなみならぬ精進とともに、したたかにして周到な生き方があった。そのいくつかの重要な問題を掘り下げてみようとする本書のはじめに、その生涯と文学の概観を記しておこう。

宗祇は、応永二十八年（一四二二）の生まれであるが、その生国は近江とも紀伊とも言われて明確ではなく、前半生についてもよくわからない。年若くして上京し、相国寺の僧坊で修行の生活に入ったが、三十余歳のころから、和歌・連歌の道に専念するようになったという。最初は宗祇に師事したが、おそらくはその没後に専順につき、寛正二年（一四六二）正月一日には師専順の発句を立句とする独吟『何人百韻』をよんでいる。初の連歌作品としては、それより早く康正三年（一四五七）に『何路百韻』に一座しており、専順門の連歌師として、専順とともに諸々の連歌会に一座したことを思われるが、寛正五年（一四六四）には、細川勝元の重臣安富盛長興行の『熊野千句』に加わるまでに頭角を現して来る。時に四十四歳のことであった。やがて、応仁前後の連歌界では、専順・能阿・行助・心敬・賢盛らについて、都の連歌師として世人の認めるところとなっていた。

文正元年（一四六六）、最初の東国下向。その東国で、武蔵に下って品川に身を寄せていた心敬と

あい、文明二年（二四七〇）、太田道真興行の『川越千句』にともに一座して関係を深め、さらに自作の連歌を送ってその指導を請い、『宗祇禅師江返札』を授けられた。宗砌のような連歌師特有の作風とは異なつて、正徹門下の歌人でもあった心敬の作風に触れることによって、宗祇の連歌は飛躍的に深みを増していった。

この間、宗祇は応仁二年（二四六八）結城氏の招きに應じて『白河紀行』の旅を行なったり、文明元年（二四六九）には、大乱のさなかを、東国と京の間を往復し、伊勢多氣に北畠教具を、奈良に一条兼良を訪ねたりしている。さらに文明三年の正月と六月の二回にわたつて、東常縁の『古今和歌集』の講釈を聴聞し、『古今和歌集両度聞書』を著して、常縁から認可を受けるなど、めまぐるしい動きを示している。

文明六年には第一自撰連歌句集『萱草』を撰しているが、その詞書によれば、足跡は信濃や越後にも及んでいる。宗祇の代表作「世にふるもさらに時雨のやどり哉」の句は、すでにこの句集に見え、後の『新撰菟玖波集』の詞書によれば、信濃にての発句であったことが知られる。

文明八年三月、美濃表佐の阿弥陀寺で『表佐千句』が催され、折しも応仁の乱を避けて身を寄せていた専順とともに一座したが、宗祇が帰京した後まもなく美濃に乱が起り、専順は巻き込まれて死亡したので、この折の一座が、はからずも最後の同席となった。すでに宗砌・智蘊・能阿・専順・心敬・行助の先達はいずれもなく、宗祇はこれらの先達の句に、存命の先輩賢盛の句を加えて『竹林抄』を撰進し、一条兼良の序を請うている。この撰集は、宗祇の理想を求めている。

集であったが、宗砌と心敬とを中心に据え、連歌史の上に、心敬の作風をはっきりと位置づけることとなった点でもきわめて重要な意味をもっている。

文明十二年、大内政弘の招きにより、五月に京を発って周防山口に下向、九月六日から十月十二日までの間、大内氏の勢力下にあった北九州各地を廻り、太宰府神社に詣でた。その間に成った紀行が『筑紫道記』である。この紀行は、連歌師の紀行の典型として、後の連歌・俳諧に大きな影響を与えている。

宗祇はすぐれた連歌の才と、如才のない処世術、さらに古典についての深い知識があいまって、大名高家に招かれることが多く、連歌界の第一人者となっていたが、文明十七年に宗伊（賢盛）がなくなり、名実ともに宗祇とその門弟たちが中心となって、連歌が都鄙にあまねく広がっていくという情勢にあった。長享二年（二四八八）、將軍足利義尚よしひきから北野社の連歌会所奉行に就任を命ぜられ、斯界最高の榮譽ある地位につくことになったが、延徳元年（二四八九）十二月には、この宗匠職を兼載けんざいに譲っている。

明応三年（二四九四）の冬には、『新撰菟玖波集』の企画が具体化し、兼載とともに撰者として、その撰進に没頭し、四年九月には奏覧に供して、准勅撰の綸旨を賜っている。

宗祇は、京都に種玉庵という草庵をかまえ、同宿の門弟をおいて、連歌の道にいそしむ一方、しばしば旅を繰り返して、地方の豪族と京都の公家との間を往復することによって、地方へは中央の文化をもたらし、また京都の公家のためには、その荘園の安堵に努力したり、公家の染筆せんぴつした

書物や筆跡の代価を持ち帰るなど、巧みに諸国をわたり歩いて、連歌師という生活を築きあげたのであった。越後の上杉氏などへは、しばしば下向しており、また、晩年はしきりに摂津との間を往復した。連歌を好んだ細川政元配下の武将たちとの交際ではあったが、もっと現実的な任務をも帯びていたことを考えさせるものがある。

明応九年七月、八十歳で越後への旅に立出、折しも京都の大火で種玉庵を焼失してしまった宗祇は、結局これが最後の旅となる。文亀二年（一五〇二）、越後を出て、信濃から上野に向かい、やがて美濃へと志したが、ついに病のために、七月三十日の夜中、箱根湯本の旅宿で、八十二歳の生涯を終えたのであった。その終焉の旅のありさまは、弟子宗長の『宗祇終焉記』につぶさに記されている。「只今の夢に定家卿にあひたてまつりし」といって、式子内親王の「玉のをよ絶えなばたえね」の歌を口ずさんだとか、鎌倉近くで行なわれた千句の中の前句「ながむる月にたちぞうかるる」の句を沈吟しながら、「ともしびのきゆるやうにしていきも絶えね」と記されているのは、いかにも、旅から旅へ漂泊した詩人宗祇にふさわしい姿であった。

宗祇の連歌は、第一句集の『萱草』の後、『老葉』『下草』の付句・発句を集めた句集、および発句集の『宇良葉』などがあり、高弟の肖柏、宗長の三人で巻いた『水無瀬三吟』『湯山三吟』が著名である。連歌論書にも、『長六文』のほかには、『吾妻問答』『淀渡』『分葉』など数多いが、いずれも具体的に連歌を初心者に指導したもので、心敬の『ささめごと』のような体系的、理念的な論著ではない。『老のすさみ』のように、ゆたかな鑑賞力によって、先達の句を鑑賞したとこ

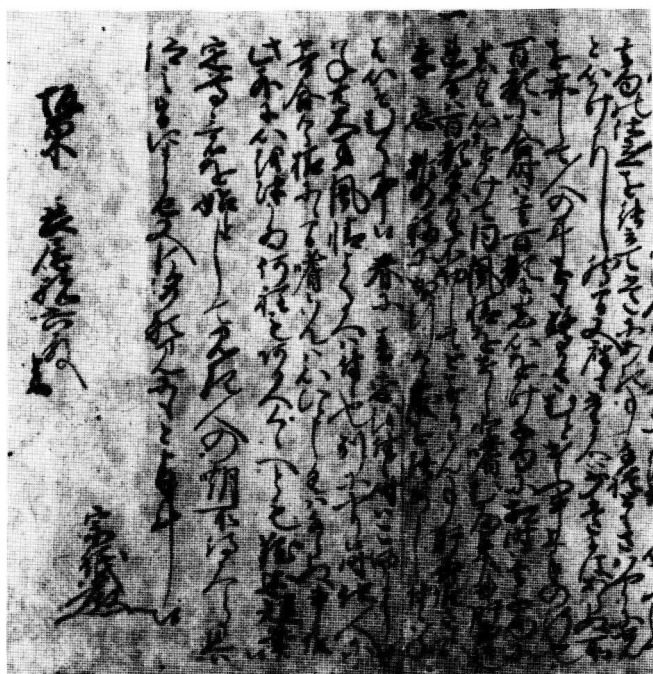
ろに、見るべきものがあるといえる。宗祇が連歌界で高い評価を得たのも、自身の作風だけでなく、一座にあって巧みに連衆を指導し、よどみなく句の流れをととのえてゆく宗匠としての捌きの見事さにあったといえよう。

なお、宗祇は『古今和歌集』のほかにも、貴顕の求めに応じて多くの古典の講釈をし、また、その注釈の書を残している。それらには、いかにも穏当な説が多い。その講釈が特に喜ばれたのは、広く諸国を旅した経験から話題が豊富で、話術にたけていたこともあったらしい。

第二章

初期連歌論の成立

——長六文と吾妻問答



宗祇のもっとも代表的な連歌論書に『吾妻問答』^{あづまんどう}があるが、この書は『長六文』^{ちようろくぶん}と合綴本として伝わっているものが多く、この二書は、ともに宗祇初期の連歌論書として、あわせて考察すべき性格をもっている。

『長六文』の成立については、「於^ニ武州五十子陣所^{いかつこ}」宗祇在判 長尾孫六殿 進覽候^{（平松本・内閣本、以下の引用は平松本による）}、「文正元年応鐘日 宗祇在判 長尾孫六殿 進^レ之候^{（法隆寺本）}とあることにより、文正元年（二四六六）十月、武蔵五十子の陣所において、長尾孫六に与えたものであることは明らかである。この年の五月、京都を出立した宗祇は、途中駿河国今川義忠のもとを訪れ、清見瀉に月を眺めたりしているが、やがて秋の半ばには武蔵の国に下着する。五十子は埼玉県本庄市、時あたかも足利成氏^{あしかがしげうじ}に対抗して、上杉房頭^{ふさあたま}、長尾景仲らが、その要害に立て籠もっているといった戦乱のさなかのことであった。宗祇自筆本といわれる太宰府天満宮本のように、本来は外題もなかったものと思われ、現存の諸本においてもさまざまな名称で伝えられているが、以下通称の『長六文』による。

『萱草』^{わすれぐさ}には「長尾左衛門尉はじめて参会の時、九月尽^{じん}に」の前書で「秋をせけ花は老せぬ菊の水」の句が見える。また『長六文』に秀逸の句をあげた最後に、

たれかはとはん木がくれのいほ

すみし世の友さへなしと聞物を

の句を「長尾左衛門尉也」とし、「此一句は金吾今度あそばし候つる。心底に挟候間、これに書加へ申候」と記している。伊地知鐵男氏の『宗祇』では、長尾左衛門尉(金吾)を景信、長尾孫六をその弟忠景に比定されていたが、両角倉一氏が長尾氏系図などを用いて、『長六文』が与えられたのは忠景の養父に当たる惣社長尾の当主景棟であることを明らかにされている(参照文献一覽、両角①)。

それに対して、『吾妻問答』の成立には問題がある。文正二年(一四六七)か文明二年(一四七〇)か、決しがついていない(伊地知④など)。文正二年の奥書を持つ本には、たとえば、牧印齋相伝本(木藤①による。内閣文庫本は、牧印齋相伝本に天理図書館本で校合を加えた本)のように、

A 于時文正第二丁亥三月日宗祇在判 長尾孫四郎殿江

とあり、文明二年とする本には、たとえば北田本『連歌論集 俳論集』底本)のように、

B 文明第二三月

とあるが、このことは、北田本に見られる次の甲乙二つの跋文とからめて考えなければならないであろう。

甲 此の条々、尋ね承り候ところ、何れも分別して申す事有るまじき事に候へども、初心の心づかひなど仰せ候へば、命に随ふばかりに候。ゆめゆめ不可有他見候也。

乙 右此の一巻は、武蔵国角田河原近きあたりにしばしば宿る事侍りに、若き人々あまた

侍りしが、京にて見る人などよりも心ざし深き様なれば、事問ひかはす事なども侍りしに、三月の下弦こげの比ひ、宵過ぐる程の物語など仕りしに、今夜は大方の人だにも月待ちなど申す物を、山の端は近き愁おもひをも言はずしてはいかでか、など語かたひし次ついでに、此の道のいろいろ尋ね侍るを、其の人の様もありがたく、又は後の世の思ひ出にもと思ひ侍りて、深ふけ行くまに、かたはしづつ申し侍るを、後に注してなど侍れば、いなびがたくて、書き留むる事になりぬ。まことに短慮未練の至、後見の嘲り、穴賢あなかしこ々々。

この甲・乙・A・Bの跋文と奥書から、

(1) 第一次成立本 甲+A

(2) 第二次成立本 甲+乙+B(ただし、この場合の甲は手控えの本の跋文)

(3) (1)をもとに(2)で校合した本 甲+Aに乙を書き入れ

(4) (2)をもとに(1)で校合した本 甲+乙+BにAを書き入れ

という四通りの場合が考えられよう。現存の写本で言えば、北田本は(2)、牧印齋相伝本は(3)ということになる。

右のように整理すれば、文正二年三月に、『吾妻問答』の第一次成立本が、長尾孫四郎に与えられたものとなる。長尾孫四郎は伊地知氏や両角氏が指摘されているように、上野国白井しろいに本拠を持つ白井長尾家の景信の子の景春で、当時は五十子の陣所に來ていたと考えられ、「武蔵国角田河原近きあたり」と第二次成立本の跋にあることから、この書の書かれたのも五十子に近い所かと

1466年 (文正元)				第1回東国下向。
1467年 (文正2・ 応仁元)	吾妻問答 (第一次)	何人百韻 (伊地知 説)	名所百韻 (金子説)	
1468年 (応仁2)		何人百韻 (島津説)		
1469年 (応仁3・ 文明元)	宗祇百句			3月～秋まで帰京。7月に奈良の 一条兼良を訪う。年末までに關 東に戻る。
1470年 (文明2)	吾妻問答 (第二次)	何人百韻 (金子説)	名所百韻 (伊地知・ 島津説)	

思われる。五十子は、当時にあつては、隅田川の上流に位置する。『吾妻問答』という書名は、江戸時代に入つて一般化したもので、もとは『角田川』^{すみだがわ}という名称の方が普通であつた。そのことは当然この書の成立とかかわるのである。この成立経緯に関する推定を、宗祇の足跡と重ねて妥当性を検討してみなければならないが、ここに問題となるのが、二つの独吟百韻の年次である。

その一つは、

月の秋花の春たつあした哉

を発句とする『何人百韻』^{なにひと}で、「応仁二年正月朔日」(大阪天満宮本。中村俊定氏蔵本)、「文明二年正月三日」(東大国文研究室本)、「明応正月朔日」(連歌集書本。太田武夫氏蔵本の三通りの年次が写本に見られる。そのうち明応は、この発句が『萱草』に見えることから誤りであるが、応仁二年(一四六八)とすべきか、文明二年(一四七〇)とすべきかは、にわかに決することは困難である。伊地知氏は、後述の『名所百韻』を文明二年元旦の作と見ることから、この百韻の方は文正

二年（二四六七）と見る推定説を立てられている。伊地知氏の推定は、山田忠雄氏蔵本に「於武州正月一日宗祇独吟」とあることや、神宮文庫蔵『連歌百韻書込』（寛政十一年写。伊地知氏が『談の聞書』とされるのは誤りか）に「於五十か」とあることより、武蔵国五十子における作と見て、もっぱら宗祇の動静とあわせて考えられたものであった。それに対して、金子金治郎氏は、この百韻の二の折の裏に、

後の世といのれと神や思ふらむ

としは五十の浪の早川

という句があつて、文明二年は、宗祇はまさしく五十歳であることから、この百韻の年次は文明二年が正しいとされるのである（金子⑦ほか）。ところが、湯之上早苗氏の指摘によれば、この百韻からの四句を含む鹿島祐徳稻荷神社中川文庫本の『宗祇百句』（湯之上①）では能阿に点を請うていることから、その成立は文明元年（二四六九）七月に奈良の大乗院に一条兼良を訪ねている折の、いったんの帰京の時点に求めなければならないかと思う。

ところで宗祇は文明二年一月十日には『川越千句』に加わっている。また『宗祇禅師江返札』に、心敬が、

秋も猶あさは雪の夕哉

水こほる江にさむき雁がね

の句をあげて、懇切に批評を加えているその付句が、実は宗祇の脇句で、その前句は『芝草句内